

## 小さな文章 村上玄一

文章の基本の第一歩は、知っていることを書くということだ。しかし、誰もが知っていることを書いても、その文章には、さほどの意味はない。人に読ませるための文章には、読み手の心を動かす工夫が必要である。その一つの方法は、人の知らないことを書くことだ。

読者に感動を与える文章を、いつでも意識的に書ける人は、まずいないであろう。どのような文章テクニックをもってしても、それだけの内容（素材）が用意されていなければ、読み手の心を動かすことはできない。それは書き手本人の経験や体験、読書量（知識欲）、想像力、取材力など、様々な要素が結実して具体性を持つ。この素材で読者を感動させるんだ、と意気込みすぎると、読み達者な人には書き手のその姿勢を見破ることだってできる。力まずに淡々と描写していくほうが、読み手の琴線に触れ、共鳴してもらえるはずだ。

### ■淡々と書いて共感を引き出す

読売新聞（二〇〇五年九月二十五日）の連載「戦後 60 年 シベリア抑留」の一部分を紹介

真っ黒な雌の子犬が、ハバロフスクの収容所にいた。名前は「クロ」。日本人抑留者たちが飼っていた。シベリアでの抑留生活も 10 年を過ぎたころ、野外の作業所に捨てられていたのを、だれかが拾ってきたらしい。抑留者たちはわずかな食事を少しずつ分け与えてかわいがった。当時は抑留者の処遇も徐々に改善され、日本から小包も届いた。井上平夫さん（84）（鳥取県八頭町）も、菓子などを与えては、クロの頭をなでた。「日本人にはなつくのに、ソ連兵を見るとけたたましくほえてね。まったく私らの心情をわかった、賢い犬だった」（中略）56 年 10 月の日ソ共同宣言調印を機に、すべての抑留者の帰国が決まった。クロとの別れでもあった。

\*

「クロだ！ クロがいるぞ」。抑留者の一人が、岸壁を指さして叫んだ。56 年 12 月 24 日朝。井上さんを含め、最後までシベリアにとどめ置かれた 10 25 人の抑留者が、帰還船「興安丸」でナホトカの港を出航した。その直後、クロが氷の海に飛び込んだ。ハバロフスクからナホトカまで、約 800 キロ。だれかがこっそりクロを帰国列車に乗せたのか——。真相は分からないが、とにかく、クロはナホトカまで来ていた。「戻れクロ、死んでしまうぞ！」「岸に帰るんだ！」。抑留者たちは甲板で叫んだが、クロは割れた氷を渡り歩いて追ってくる。氷の聞から海に落ちた。抑留者たちの悲鳴が上がった。何度も帰還船の航海をこなした「引き揚げ者の父」と呼ばれた玉有勇船長が船を止めた。縄ばしごで下りた船員が、クロを抱き上げた。甲板に響く歓声。クロはぶるっと体を震わせて、全身の氷を振り払い、しっぽをうれしそうに振った。みんな涙が止まらなかった。

やや長めの引用になってしまったが、読者は、この記事にどのような感想を抱いたであろうか。記者（書き手）の表現力や描写力によって、情景はいかようにも変わってくる。それが「文章力」の奥深いところである。

### 書き手の表現の仕方、描写の

工夫についても、ときには目配りしてみる必要があるだろう。面白いから読む、為になるから読む、といった姿勢では、文章上達の道にはつながりにくい。